

# 西新町遺跡

福岡市早良区西新所在遺跡の調査

福岡県文化財調査報告書  
第 72 集

1985

福岡県教育委員会

## 序

この報告書は、福岡県教育委員会が本年度に実施する修猷館高等学校図書館改築に際し、これに先行して埋蔵文化財を発掘調査した概要報告であります。

修猷館高等学校は、弥生時代から古墳時代の遺跡として有名な西新町遺跡の中心地近くに位置するところから、同校の図書館全面改築に際して、やむなく破壊される遺跡の記録保存の処置をとり、ここに報告するものであります。

なお、発掘調査に際しては、福岡県建築部営繕課にご協力いただいたことを心から感謝申し上げます。

昭和60年3月31日

福岡県教育委員会  
教育長 友野 隆

## 例言

1. 本書は、福岡県教育委員会が修猷館高等学校図書館改築のために破壊される埋蔵文化財を昭和59年8月6日から8月27日までに発掘調査した概要報告である。
2. 本書の執筆は、柳田康雄と赤司善彦が分担した。
3. 遺物の整理・図面作成においては、担当者の外に岩瀬正信・豊福弥生・原富子が従事し、掲載の写真は遺跡を柳田、遺物を平島美代子が撮影した。
4. 本書の編集は、柳田が担当した。

## 本文目次

序

I 調査の経過	（柳田）	1
II 遺跡の位置と環境	（柳田）	1
III 遺構と遺物	（赤司）	4
IV 結語	（柳田）	27

## I 調査の経過

本調査は、県立修猷館高等学校図書館改築に伴う緊急発掘調査である。福岡県教育委員会は、同校の図書館改築を計画したところから、担当課である施設課から文化課への発掘調査依頼となった。既設図書館解体に先立ち、周辺のトレンチ調査を実施したところ、住居跡から朝鮮半島産の土器を発見し、遺跡の重要性を確認した。なお、建設工事は急いでいるために、施工する建築部営繕課および修猷館高等学校と協議し、学校の夏休期間中に基礎杭打ちが終るように応急調査を実施することとなった。

調査は、既設図書館解体工事完了と同時に実施することとしたが、コンクリート基礎掘削に立合って、遺跡の破壊を最少限にとどめることに努力した。

発掘調査は、昭和59年8月6日から8月27日まで実施したが、遺構が深いことから、表土除去に7日間を費した。調査関係者は下記のとおり。

総括	教育長	友野隆	教育次長	安倍徹
	管理部長	伊藤博之	文化課長	前田栄一
	課長補佐	中村一世	庶務係長	松尾満
	主任主事	竹内洋征	調査第1係長	宮小路賀宏

発掘調査 柳田康雄・木村幾多郎・馬田弘稔

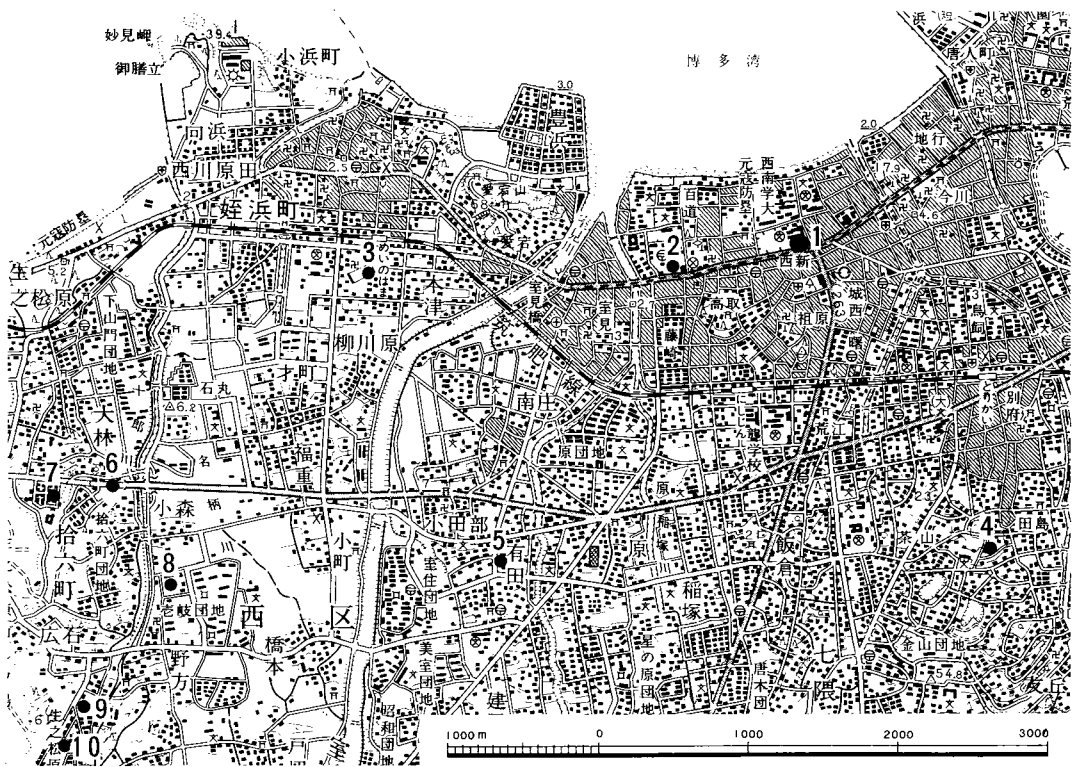
このほかに、調査補助員として赤司善彦・佐藤一郎・岡部裕俊・田中稿二が参加したが、赤司は10月1日付で県文化課職員となった。

なお、発掘調査に際しては、修猷館高等学校の原岡鐵二校長・平井元治事務長、西南学院大学の下條信行助教授にご協力いただいた。また、福岡市文化課の二宮忠司・小林義彦両氏には、作業員の手配等で大変お世話になったことを感謝します。

## II 遺跡の位置と環境

西新町遺跡は、福岡市早良区西新に所在し、昭和51～53年の地下鉄関係の発掘調査によって初めて遺跡の実体が明らかになった。遺跡は、福岡平野と早良平野を分括する低丘陵先端の砂丘上に立地するが、現在は国道202号線が遺跡の中央を東西に貫通し、南側はビルや商店、北側は修猷館高等学校となっている。遺跡の立地する砂丘は、東側を樋井川、西側を室見川に切断されて博多湾に面するが、同一砂丘西側には古墳時代初期の方形周溝墓群を伴う藤崎遺跡群があり、両遺跡の北辺には東西に走る元寇防塁がある。

国道202号線の下を通る地下鉄建設に伴う発掘調査では、弥生中期の甕棺墓群と古墳初期の住居跡群が検出されたが、遺跡の位置は修猷館正門から西側地区に寄っていた。国道より北側の修猷館高等学校では、これまでに発掘調査されたことはないが、校内北端に位置する体育館建設に際し第4図のような古式土師器群が同校教師によって採集されている。(柳田)

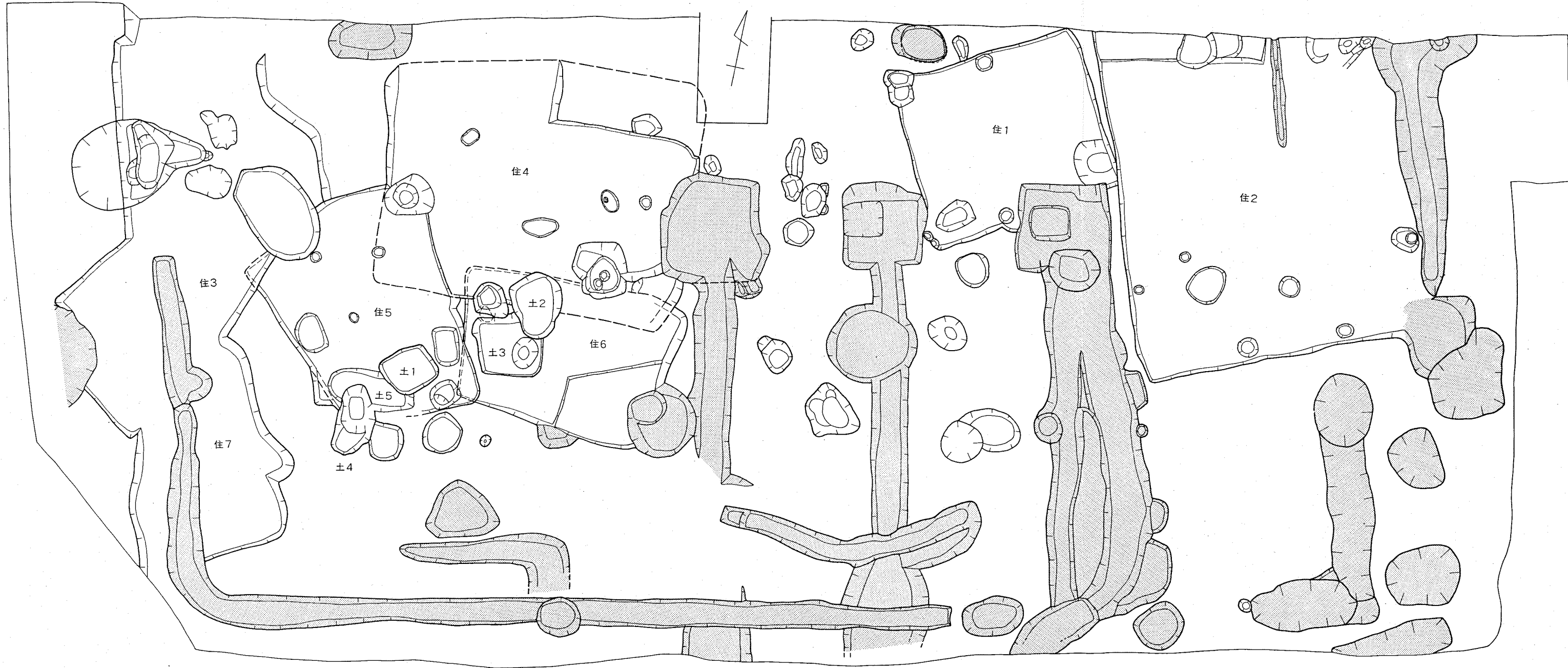


第1図 早良平野古墳時代前期の遺跡分布図 (1/50,000)

- 1 西新町遺跡    2 藤崎遺跡    3 五島山古墳    4 京ノ隈古墳    5 有田・小田部遺跡  
 6 湯納遺跡    7 宮の前遺跡    8 牟田遺跡    9 野方中原遺跡    10 野方塚原遺跡

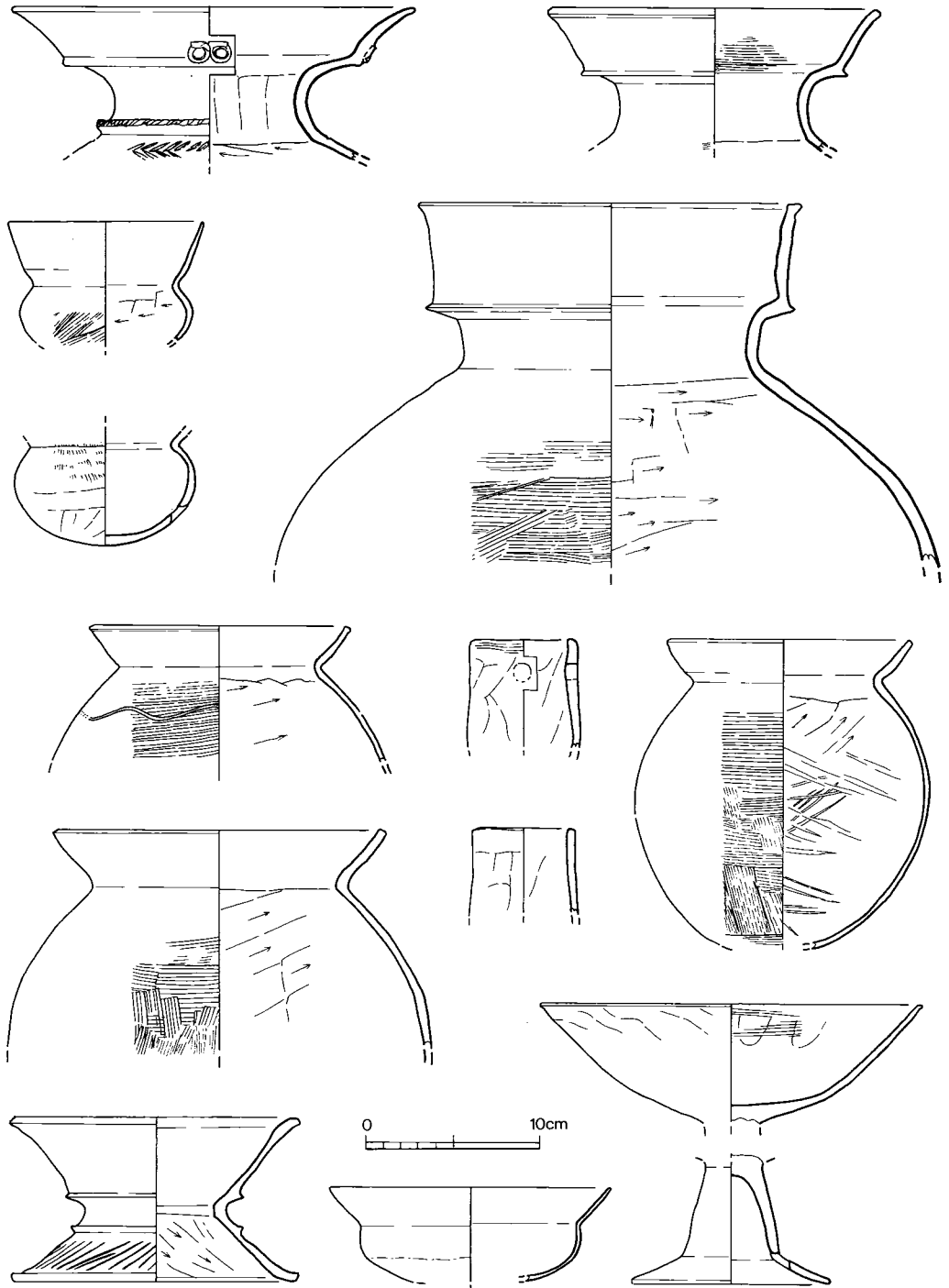


第2図 西新町遺跡位置図 (1/4,000)



第3図 西新町遺跡全体図 (1/100)

0 5m



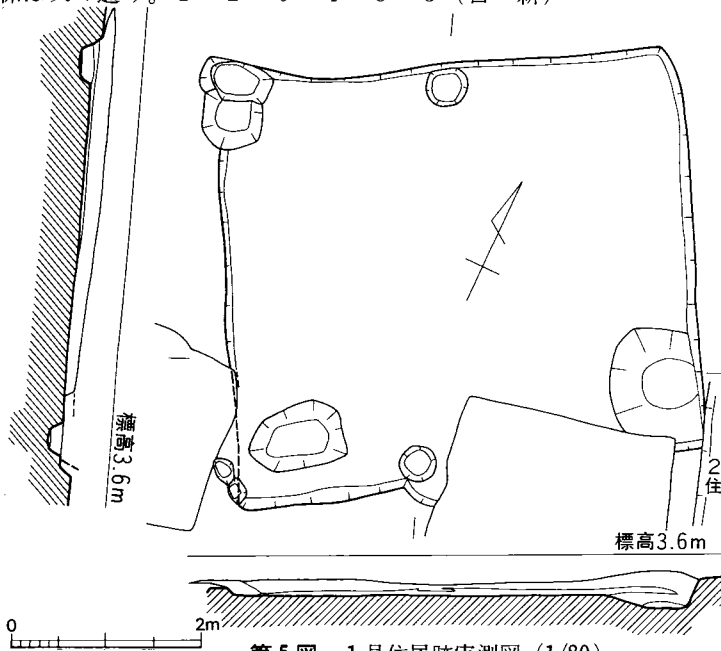
第4図 修猷館高等学校体育館出土土器実測図 (1/4)

### III 遺構と遺物

面積約700㎡の調査区内には、近・現代の土壌（多くはゴミ穴）や溝が散在し、全形を知る事の出来る遺構は少ない。また、渴きの早い砂丘上に位置する為、遺構の検出作業には多くの時間を費やすことになった。最終的に古墳時代の住居跡7軒、歴史時代の土壌5基を検出した。

#### 1. 住居跡

住居跡は7軒のうち2軒が調査区東半で、5軒が西半でそれぞれ重複している。確認した新旧関係は次の通り。1→2・6→4→5→3（古→新）



(1) 1号住居跡（図版2-1，第5図）

調査区北東部に位置する東西5m、南北4.4mの長方形住居跡である。南東隅を2号住居跡に切れ、南壁際の一部を建物基礎に破壊されるが、遺存状態は比較的良い。床面で南・北の壁に沿ったピットと、浅い土壌を検出した。遺物は覆土中より陶質土器や少量の土師器が出土している。

陶質土器（図版4，第10図1）

硬質灰褐色の縄蓆叩きを残す短頸壺である。須恵器に比べやや軟質である。外面の縄蓆は縦に揃い、底部近くで交差する。沈線間の幅は下位で広がる傾向にある。韓国の三東洞遺跡の土壌墓出土土器に類似するものがみられる（註1）。図は口縁部以外、破片からの復元である。

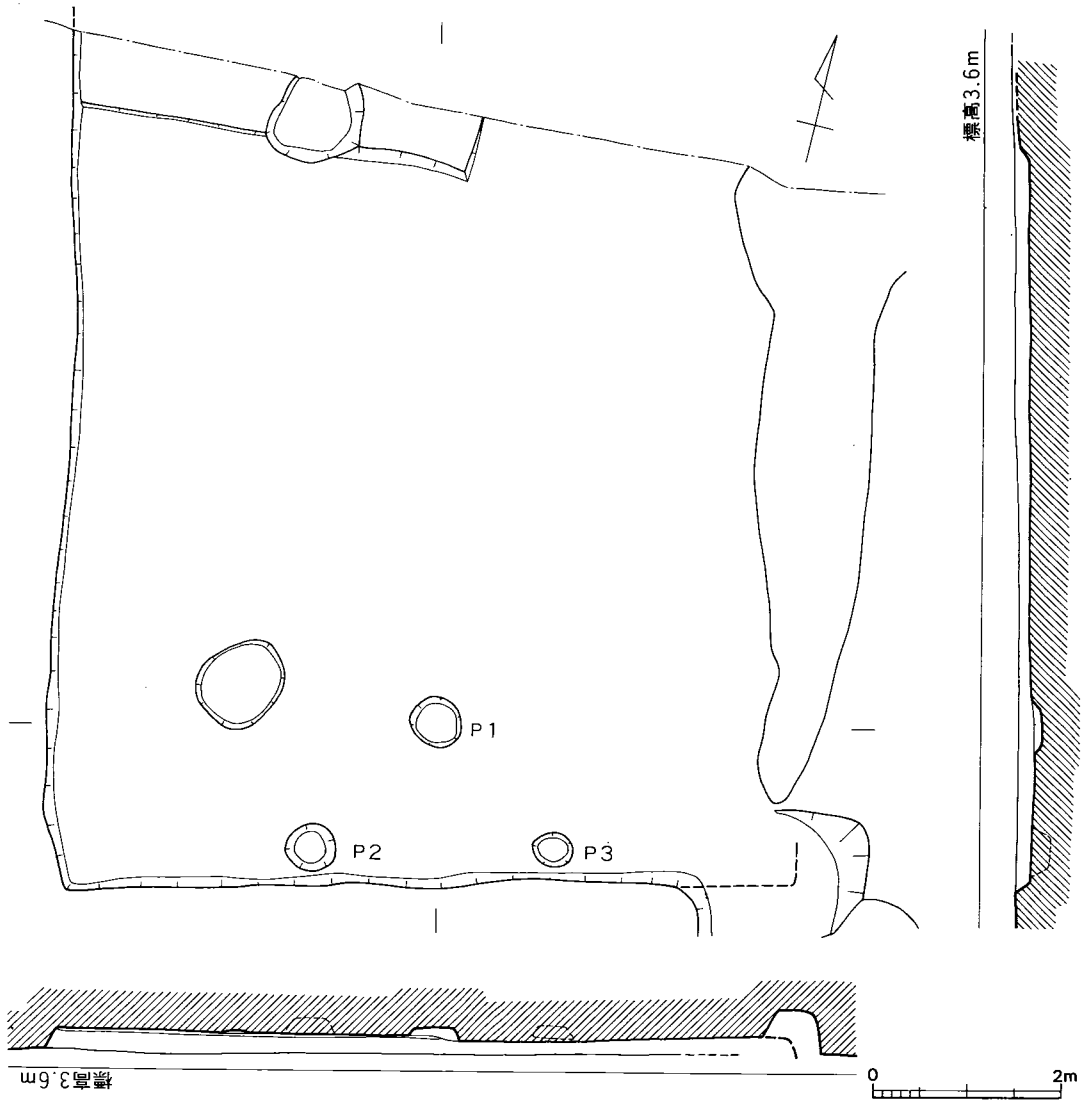
#### 土師器（第10図）

壺（2-6） 2~5は二重口縁をなすが、2~4には竹管文を施す。6は小形丸底柑で、短かく外反する口縁をもつ。

甕（7~9） 7・8は外面に細かい右上りの叩きを残し、内面のケズリは屈曲部よりやや下がって始まる。9は屈曲部の稜が鋭く、端部は摘み上げた後にナデて丸く整える。

(2) 2号住居跡（図版2-2，第6図）

1号住居跡を切る。北壁は発掘区外、東壁は近世溝に切れ全形は不明。残存長南北9m、東西8mの規模の大きい長方形住居跡である。北壁と西壁にかけてベッド状の張り出しを設ける。床面



第6図 2号住居跡実測図 (1/80)

から浅目に掘られた土壇と、三角形に並ぶピットを検出した。P1は南側の主軸柱、壁際のP2・3は施設柱と考えられる。床面中央で、口縁を伏せた朝鮮半島系の広口壺を、またその周辺で土師器、石支脚などを検出した。

**朝鮮半島系土器** (図版4, 第11図 10~12)

10は床面中央で検出した軟質の広口壺である。後世の削平を受け底部は接合しない。胴部は上位で強く張り、口縁端部は緩く内湾する。細筋の平行叩きと格子目叩きを施し、頸部から胴部最大径よりやや下がった位置まで沈線を巡らす。11は10の東側で出土した甑で、12も同形の把手であろう。調整や焼成は、土師器に似る。底部に径1cmの円形孔を蜂の巣状に穿つ。

**土師器** (第11~13図)

**壺 (13~24)** 13~16は大形の二重口縁壺である。13は薄手に作られ、上部は外傾し端部の内側に弱い稜をもつ。14~16は上半が直立し、外端を肥厚させるが上面は平坦となる。板目小口による施文を14・16はもつ。17~19は広口壺で、外反気味に伸びて外に肥厚する17と、端部や頸部の稜が裏



の手法と似る18・19がある。20～24は小形丸底埴で、20は小さい体部から直線気味に伸びる口縁をもち、器肉は厚目である。21～24の口縁は短かく内湾し、頸部の屈曲が弱い。

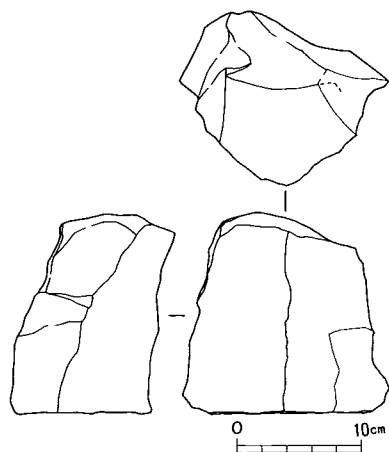
**甕** (25～29) いづれも口縁は内湾気味で端部を摘み出す。25は体部が丸味を持ち端部を摘み上げた後にナデて丸く仕上げる。内面屈曲部にも稜を残すなど古い様相をもつ。

**高杯** (30～36) 杯部下位の屈曲が明瞭な30や、屈曲が緩やかで、短かく中膨らんだ脚部を特徴とする31～36がある。ともに口縁端部は丸く整える。

**椀** (37～41) 38～41は脚台付で、39はやや深目である。40・41は脚裾部のみで、屈曲して開く。

**器台** (42～44) 42は小形丸底土器とセットをなすもので、受部の立ち上りは外反する。43・44は鼓形器台で、屈曲部の突帯は小さく、上下の間隔は狭い。

**石支脚** (第7図) 住居跡内の西側で出土した。火力が拡散する様、図前面のみ粗く二面に整える。外面全体が赤変し、平坦な底面には炭化物や焼土が付着する。石材は花崗岩質である。



第7図 2号住居跡出土石支脚 (1/6)

(3) 3号住居跡 (図版2-4, 第8図)

調査区西端に位置し、5・7号住居跡と重複する。北東壁の一部は5号住居跡を切るが、7号住居跡との切り合い関係は掴めていない。また、北西の壁は攪乱され不明だが、東西3.6m、南北残長6mの長方形住居跡である。柱穴その他は不明。朝鮮半島系の直口壺や、少量の土師器が出土した。

**朝鮮半島系土器** (第14図, 45)

住居跡内西側より出土した軟質の直口壺である。やや肩の下がった長胴を持ち、口縁部は外湾気味に直立し端部は外側に肥厚する。内面にロクロによる調整痕を観察できる。

**土師器** (第14図)

**壺** (46～49) 二重口縁壺には、口縁部をそのまま整えると46と、外に小さく突出する47・48がある。49は小形丸底埴で、半球形の体部から、あまり締らず内湾気味に長く伸びる口縁をもつ。

**甕** (50～52) 50は薄手づくりの小形品で、二重口縁をもつが、接合部外面は突帯化している。51の上端部は内湾気味で、内側に弱い稜をつくる。52の体部は丸く、口縁部は肥厚してやや立つ。

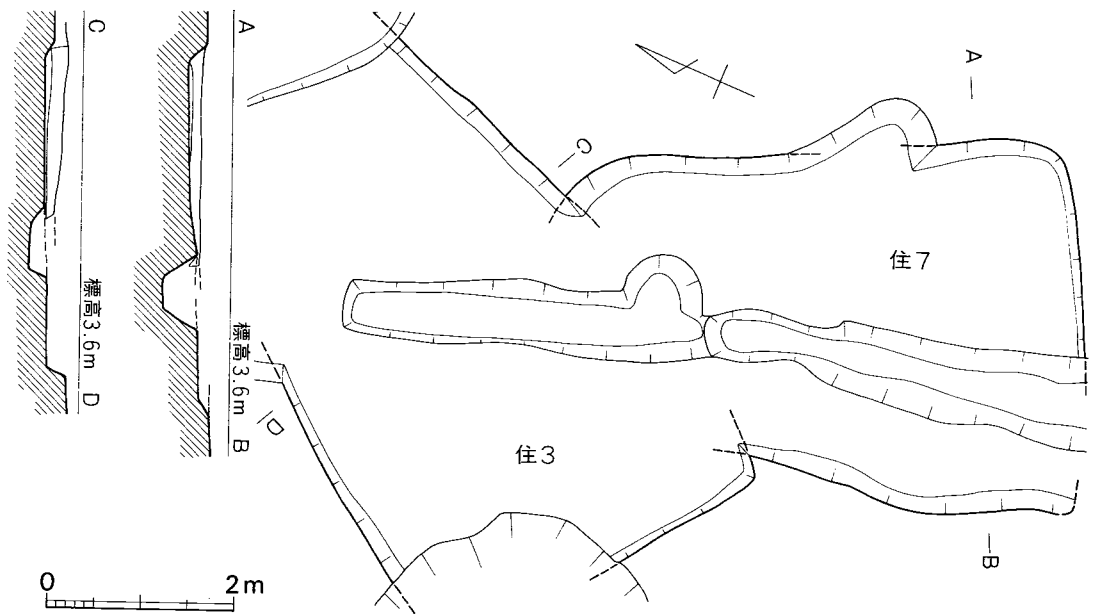
**高杯** (53) 杯部を欠失するが、中膨らんだ脚部から強く屈曲して裾部は開き、端部は丸い。

**器台** (54) 皿状の受部を有するもので、裾部は直線的に広がる。

**タコ壺** (55) 下半部を欠失するが、砲弾状の器形をなすものである。

(4) 4号住居跡 (図版3-1, 第9図)

集中する住居跡の北側にあり、5・6号住居跡と重複する。北壁側は確認面の段階で、すでに消失し、平面形は東西8m、南北残長6.5mの長方形をなす。東北隅にベッド状遺構がつくられ、床面か



第8図 3・7号住居跡実測図 (1/80)

ら4個のピットと、西壁に沿った深さ60cmの楕円形土壌を検出したが、支柱穴は不明。黒褐色斑点の混じる覆土からパンケース $\frac{1}{2}$ 程の土師器細片が出土し、床面の中央南寄り土器が集中して検出されたが、朝鮮半島系の格子目叩きを残した土器片も含まれていた。

#### 朝鮮半島系土器 (図版4, 第16図 75)

軟質で、傾きは胴肩部を示し、外面に菱形の格子目叩きを施し細い沈線を巡らす。

#### 土師器 (第14~16図)

**壺** (56~62) 58は東壁側、他は中央南寄りの位置で検出した。56・57は直口壺で、56の内面頸部には鋭い稜をもつ。57の口縁部は大きく開き先端を細めて終る。58は短頸壺で、頸部に刻目の突帯が巡る。59~62は小形丸底甗で、いずれも内湾気味の短かい口縁を持つ。60は完形で体部の屈曲が強く、口縁部に厚味を有す。62の体部は深く、口縁の開きは、体部の最大径に及ばない。

**甗** (63~74) 67・69・72~74は覆土上面から出土し、他は中央南寄りで検出されたものである。66は二重口縁をなし、頸部のくびれは弱く、短かく外反する口縁の上半はやや開く。67~71は布留系統の甗で、口縁部が直線気味に外傾し、内端が突出した67、内湾気味で両端あるいは外端にナデ出される69~71や、胴部に丸味を持ち器肉は厚く、内湾する口縁部をそのまま収める68がある。72~74は口端部を摘み上げるもので、73・74は同一個体であるが、器表に細い右上りの叩きを残す。

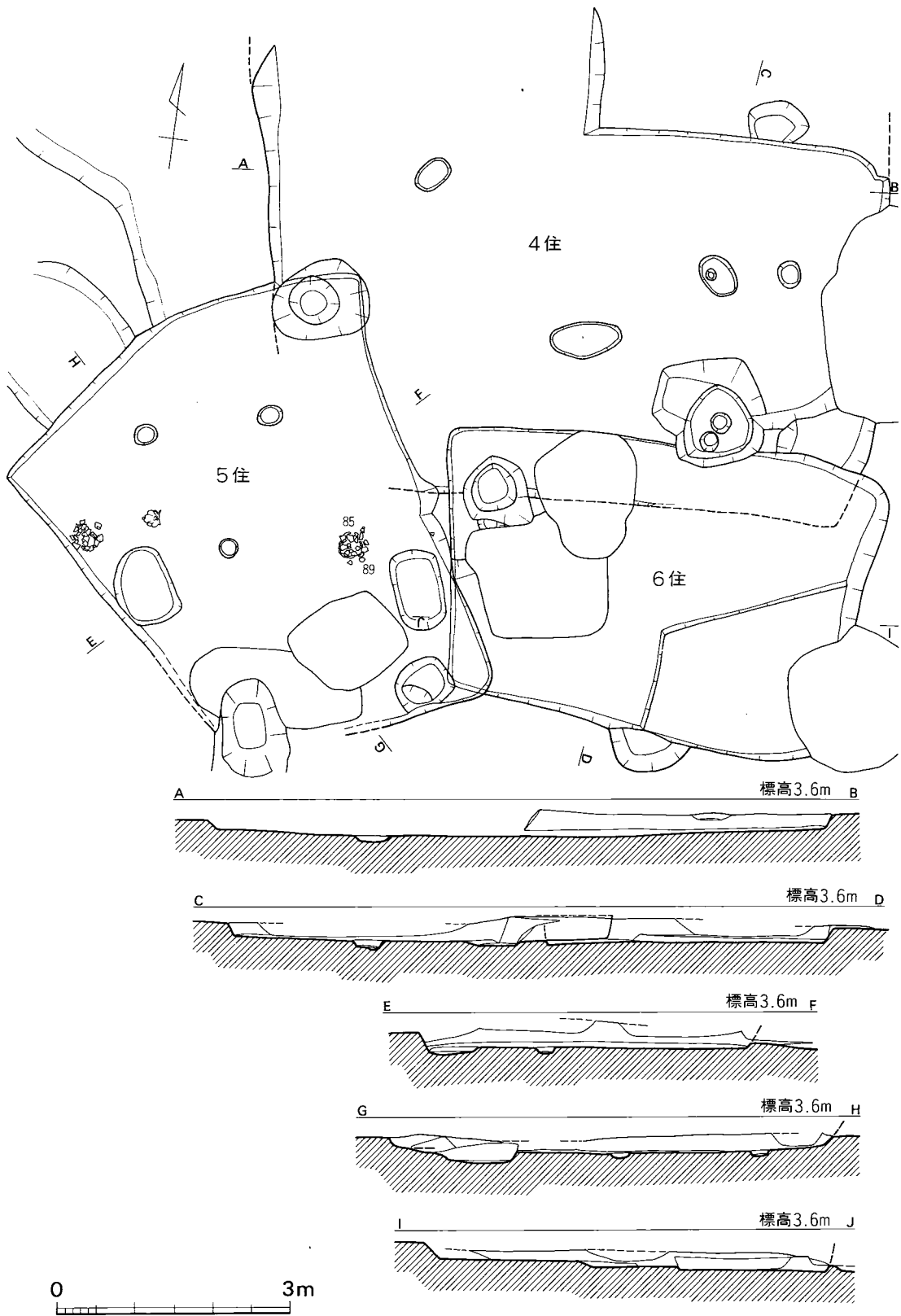
**鉢** (76・77) 張りの弱い丸底の体部から強く屈曲する口縁部は、上端近くまで内湾して収まる。

**高杯** (78・79) 78の屈曲は緩く、79は水平に広がる裾部で、椀状の受部を持つと思われる。

**器台** (80) 略完形の鼓形器台で、受部下半に一条の沈線を施す。屈曲部の突帯は鋭い。

**タコ壺** (81~83) 砲弾状の器形をなすもので、83は完形で出土した。

**手捏土器** (84) 外反する口縁部をもっていたと思われる。



第9図 4・5・6号住居跡実測 (1/80)

(5) 5号住居跡 (図版3-3・4, 第9図)

集中する住居跡の中央に位置し、3号住居跡に切られるが、4・6号住居跡を切る。西北隅は3号住居跡の床面から検出し、中軸長が6mと5mの不整長方形プランをなす。床面から3個のピットと西壁際で浅い土壌を一基確認した。ピットは住居跡に伴なう柱穴と考えられるが、配置の復元に苦慮する。出土遺物には二点の朝鮮半島系土器と多数の土師器がある。特に瓦質の短頸壺85と小形丸底埴89は中央東寄りの床面で、東壁側にかしいだ85の胴部南側に89の口縁を密着させた状態で検出した。確実な共伴資料である。

**朝鮮半島系土器** (図版4, 第16・17図 85・96)

85は瓦質の短頸壺である。胴部は上位でやや張り、口縁部は短かく外反する。外傾する上端部は内反り気味である。胴部は叩き後ナデ消す。96は軟質の甕で、胴部に張りを持ち、外反する口縁の端部に凹線を巡らす。器表に平坦面がみられ、整形に叩きの可能性をもつ。

**土師器** (第16~18図)

**壺** (86~93) 86・87は大形の二重口縁壺で、86は卵形の胴部から頸部は強くすぼまる。口縁上半は開き端部を肥厚する。87の口縁上半は直立し丸く収める。88は外端部を肥厚する直口壺。89~92は小形丸底埴で、89・90の口縁は未発達である。91は大きく広がり先細る口縁をもつが、体部に張りをもたない。いずれも同時期に置かれる。93は球形の体部から内湾気味に伸びる広口壺である。

**甕** (97~102) いずれも器肉が薄く、内外の調整を共通する。上半が内湾する口縁をもつものは、端部が内側に突出する97・98と、両端に小さく突出する99・100に分けられる。口縁全体が内湾気味な101・102もあるが、101の胴部は丸味をもつ・98・100の肩部には沈線を巡らす。

**椀** (94~95) 94は薄手づくりで、端部は丸い。95は脚台付で、上部を欠失する。

(6) 6号住居跡 (図版3-1, 第9図)

4号住居跡と北壁側を、5号住居跡とは南西隅が重複する位置にあり、東西を長軸にもつ5×3.7mの長方形住居跡である。東壁と南壁にわたりベッド状遺構を配置するが、柱穴その他の遺構は不明。住居跡内から朝鮮半島系土器2個体分の破片と、土師器が少量出土した。

**朝鮮半島系土器** (図版4, 第18図 103・104)

103は軟質で、外面に菱形の格子目叩きを残すが交差しており、縄蓆風にみえる。104は硬質で、浅い格子目叩きを施す。ともに内面の当板痕はナデ消される。

**土師器** (第18・19図)

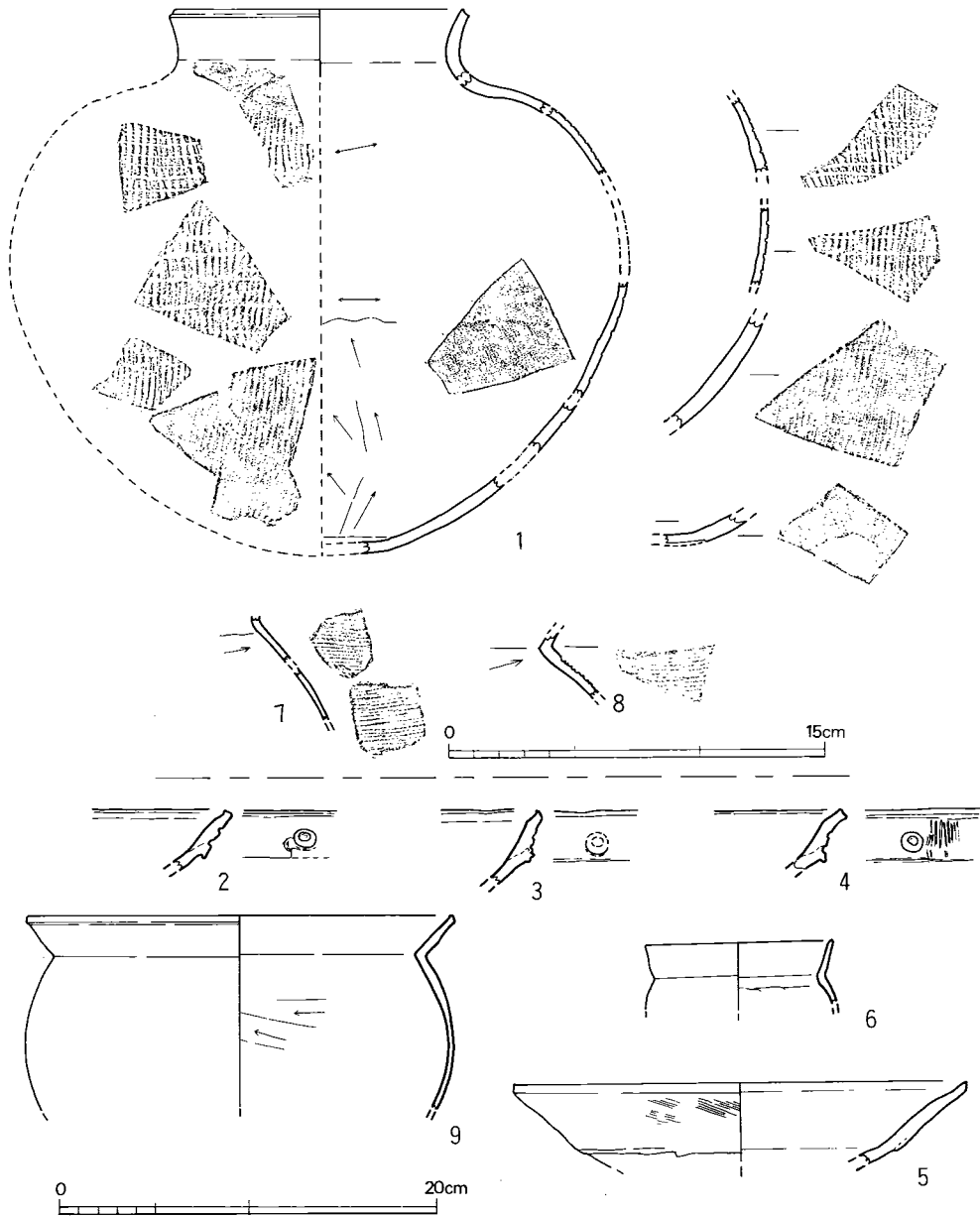
**壺** (105・106) 105は口縁部が短かく外反し直立する二重口縁壺。106は偏球形の薄い体部破片であるが、口縁部が大きく外反する二重口縁をもつと思われる。

**甕** (107~109) 107は肩が張り、口縁部は肥厚し、やや立つ。108・109は口縁上半が内湾し、外傾する端部は外に突出する。109の胴肩部には櫛描き波状文を施す。

**器台** (110) 円錐状に広がり裾端部に至る。皿状の受部をもつものである。

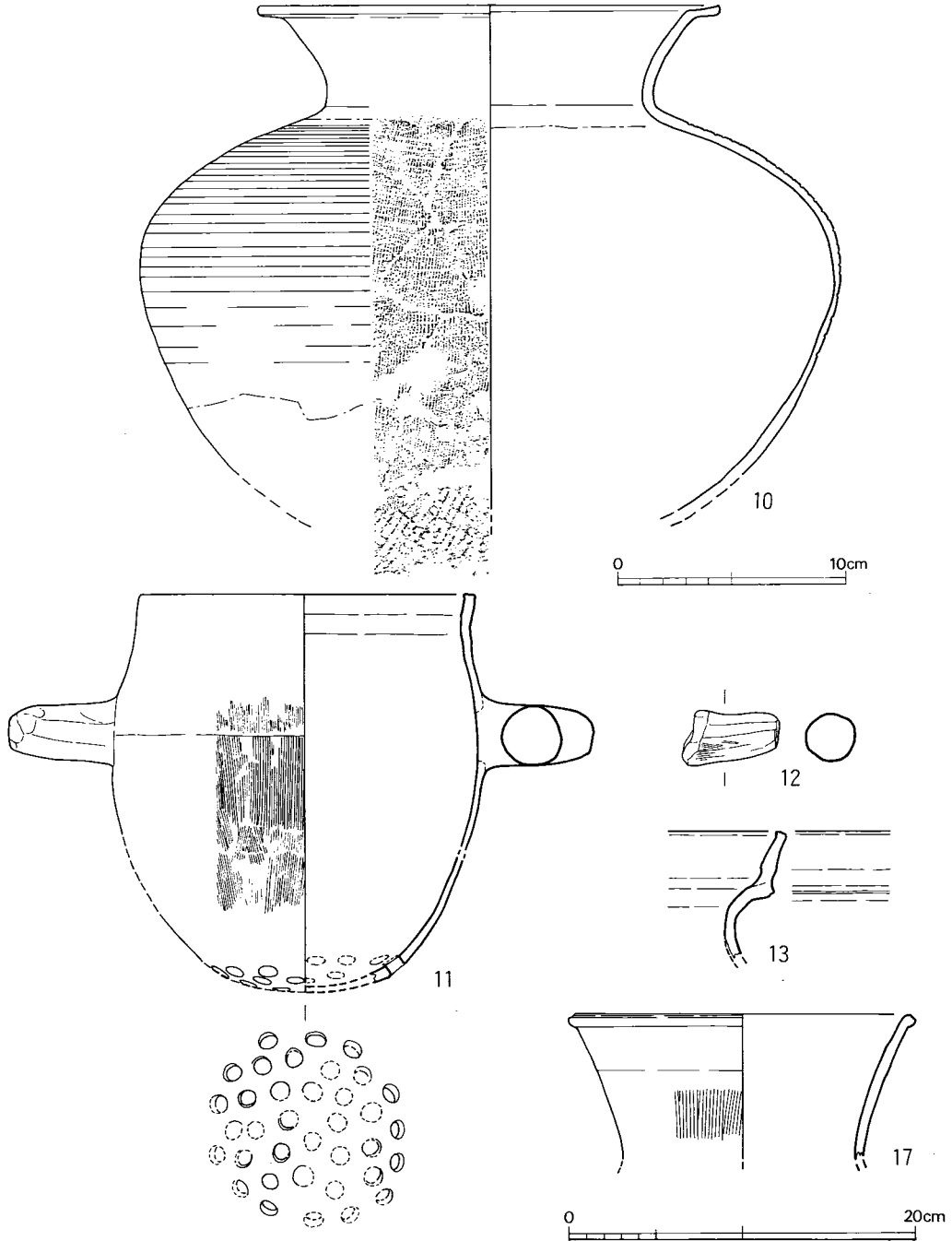
(7) 7号住居跡 (第8図)

調査区西隅で検出し、北壁側は3号住居跡と重複するが、上面を攪乱され遺存状態が悪く、3号発掘中には住居跡と確定出来ず、新旧関係は不明である。長軸残存長5.4m、短軸3.4mを測り、北西に伸びる不整長方形を呈す住居跡である。柱穴その他の遺構は不明。覆土中より少量の古式土師器が出土しているが、いずれも細片で図化しえない。

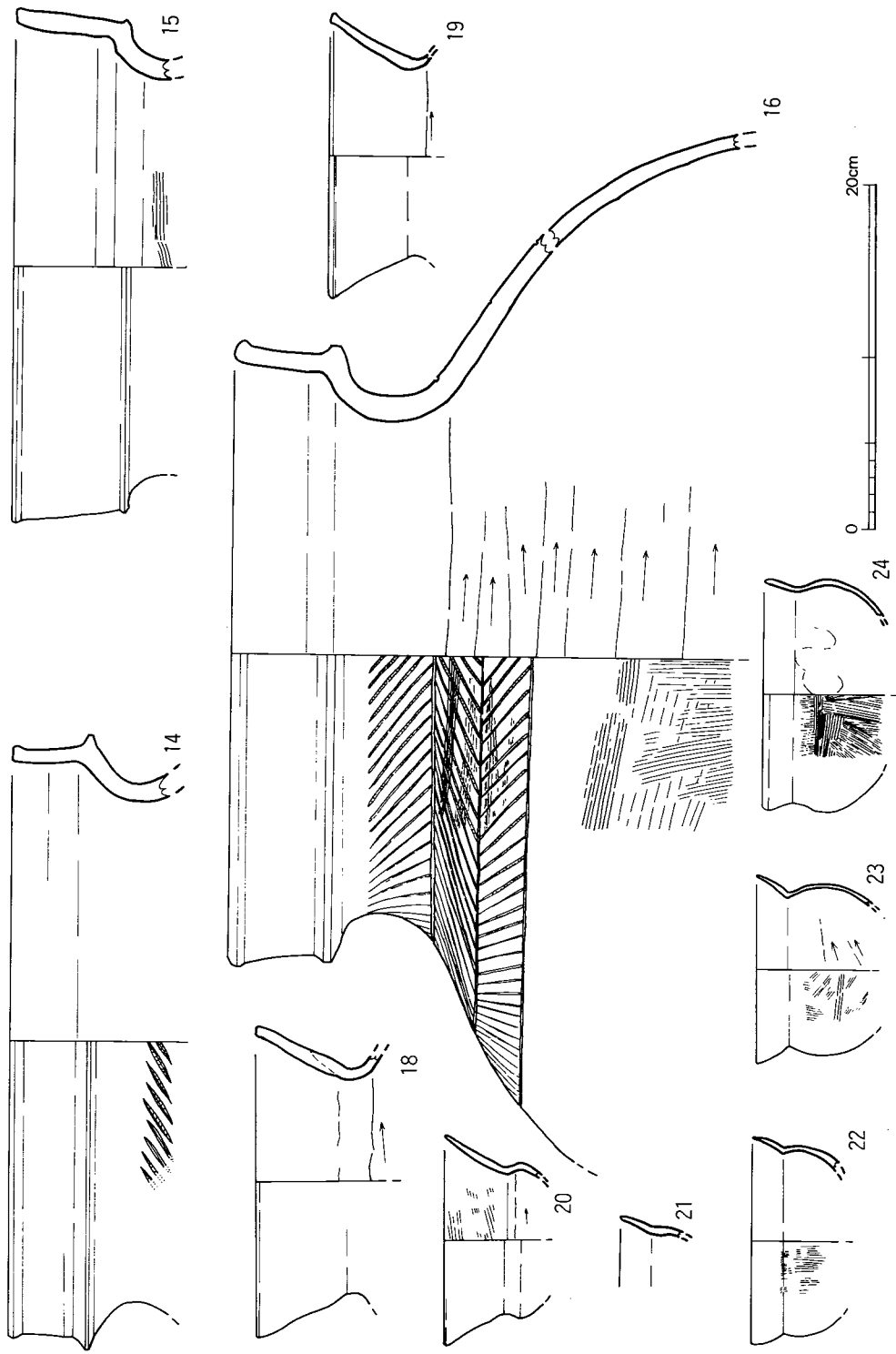


第10図 1号住居跡出土土器実測図 (1/3, 1/4)

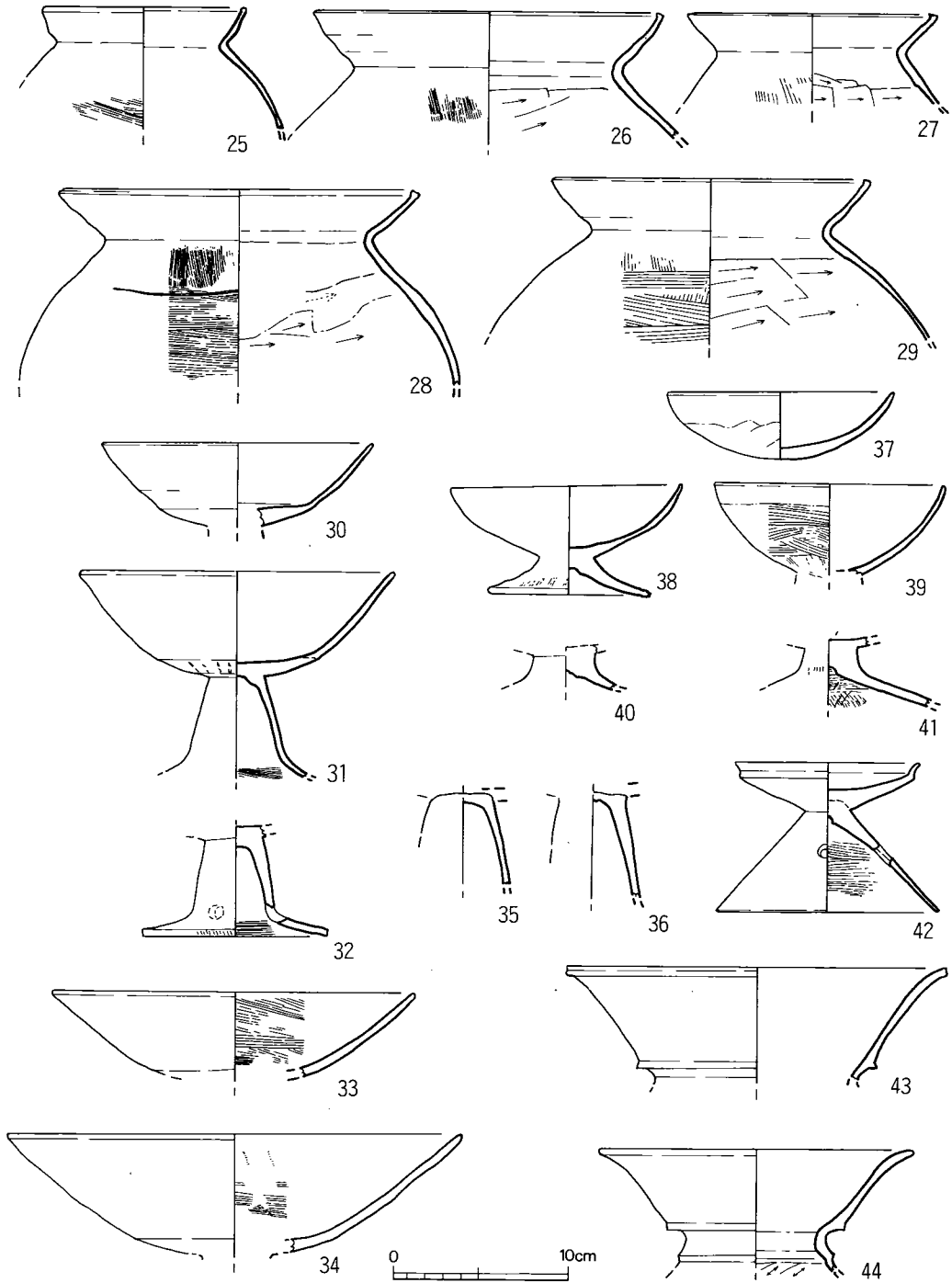
以上、住居跡から出土した土師器は、柳田編年のIb式からIIa式にあてることが出来る(註2)。住居跡によって出土量や、器種構成にばらつきがあるが、1号住居跡はIb式を主体としており最も古く位置づけられる。2~7号住居跡の床面出土器は、IIa式に属す。これらの中で、壺や甕に古い様相を残す2号は他に先行する。他は、7号を除き一括して把握できる土器群であるが、切り合い関係に見合う時期差を見出し得ない。新旧の様相の混在する期間が、それだけ長かったと理解される。



第11図 2号住居跡出土土器実測図(1) (1/3, 1/4)

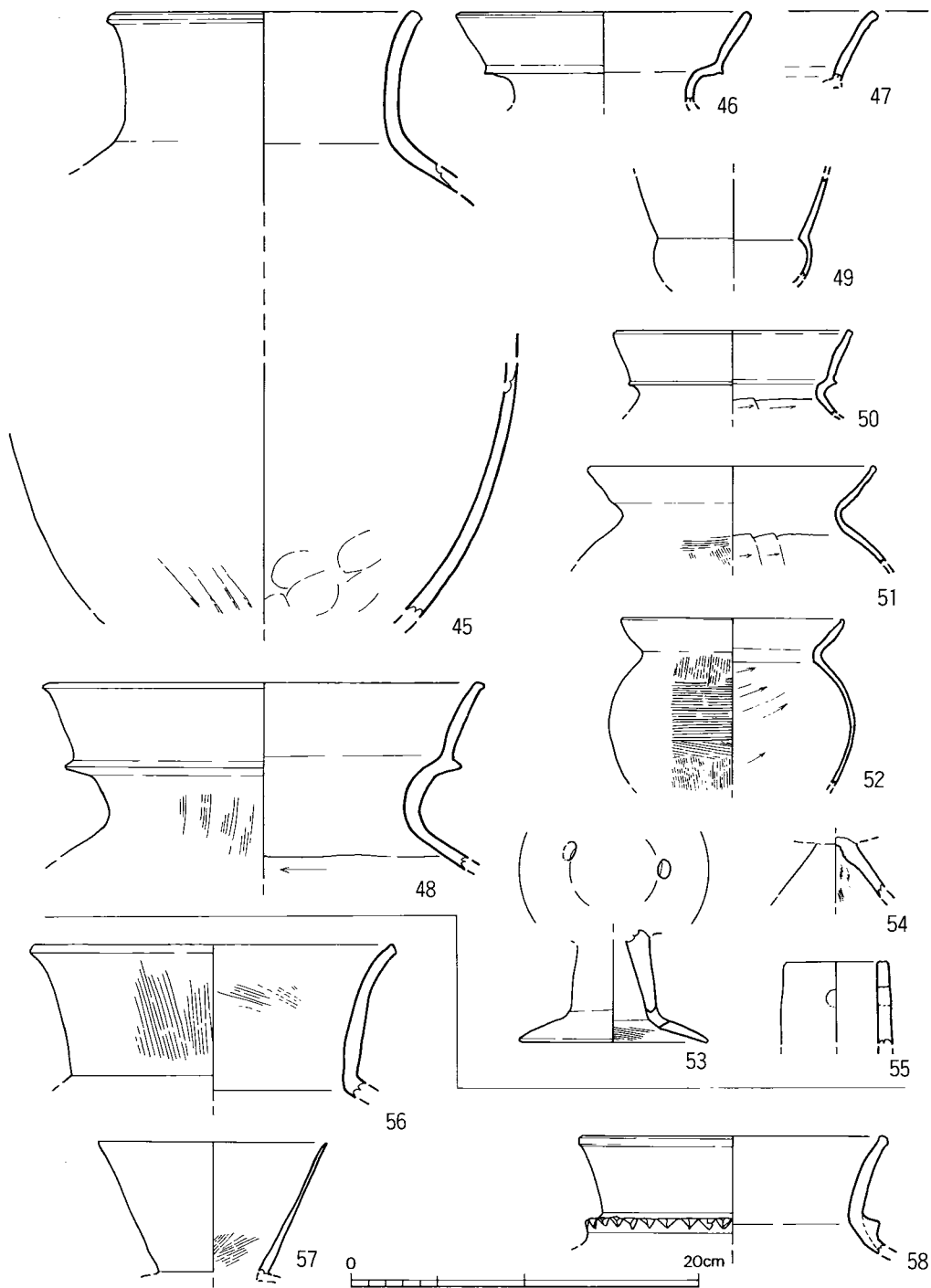


第12图 2号住居跡出土土器実測図(2) (1/4)

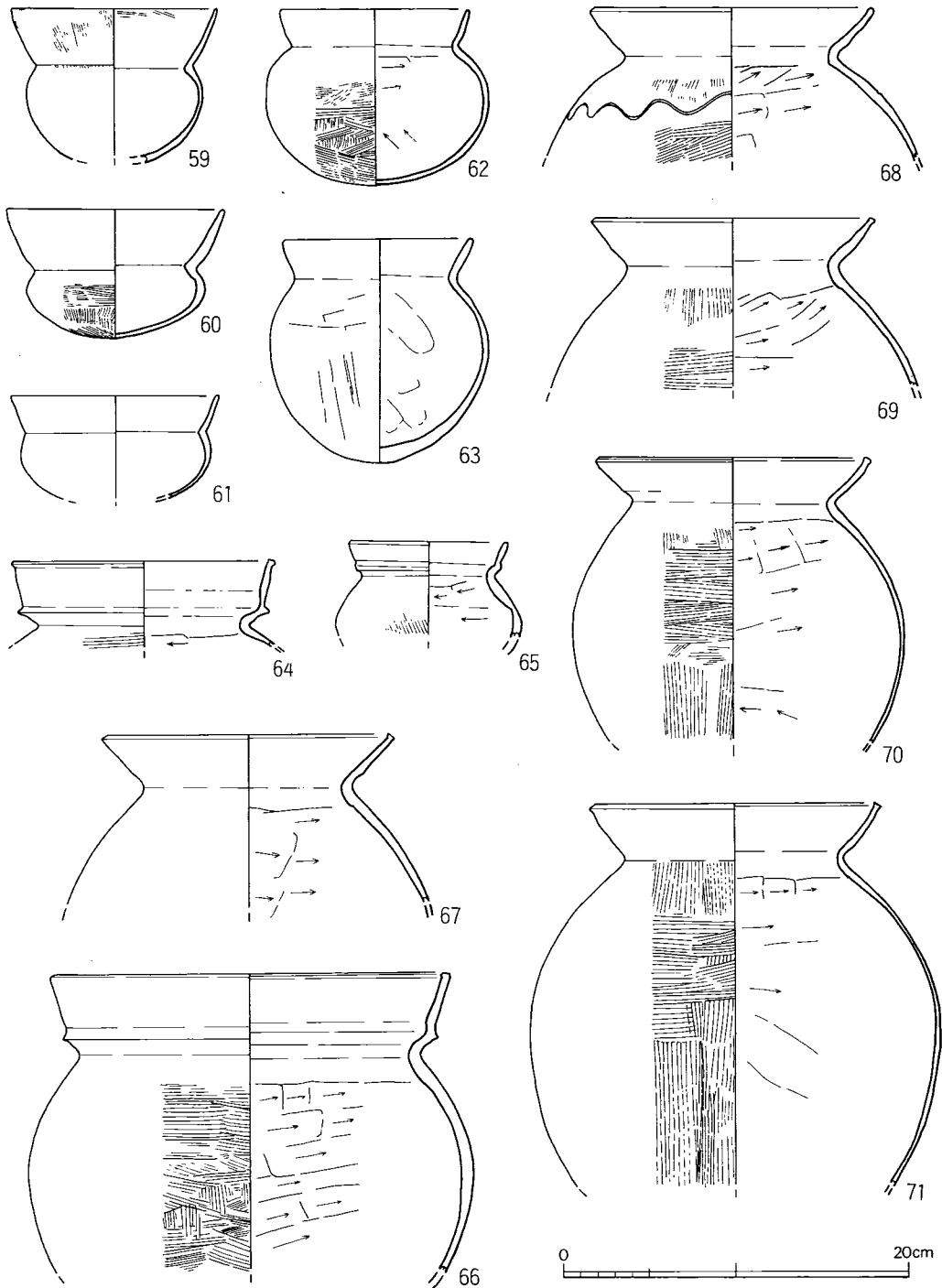


第13图 2号住居跡出土土器実測図(3)(1/4)

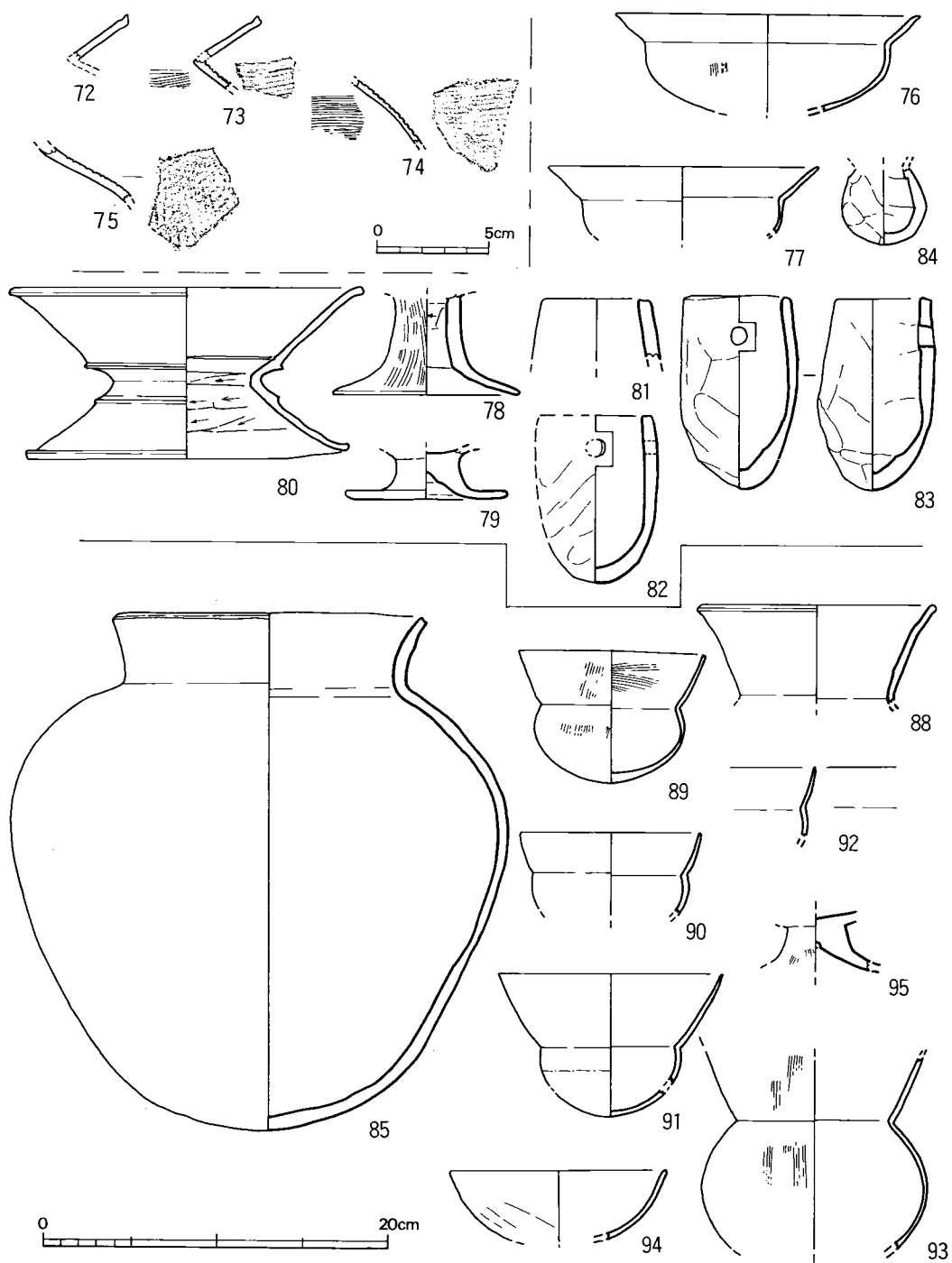




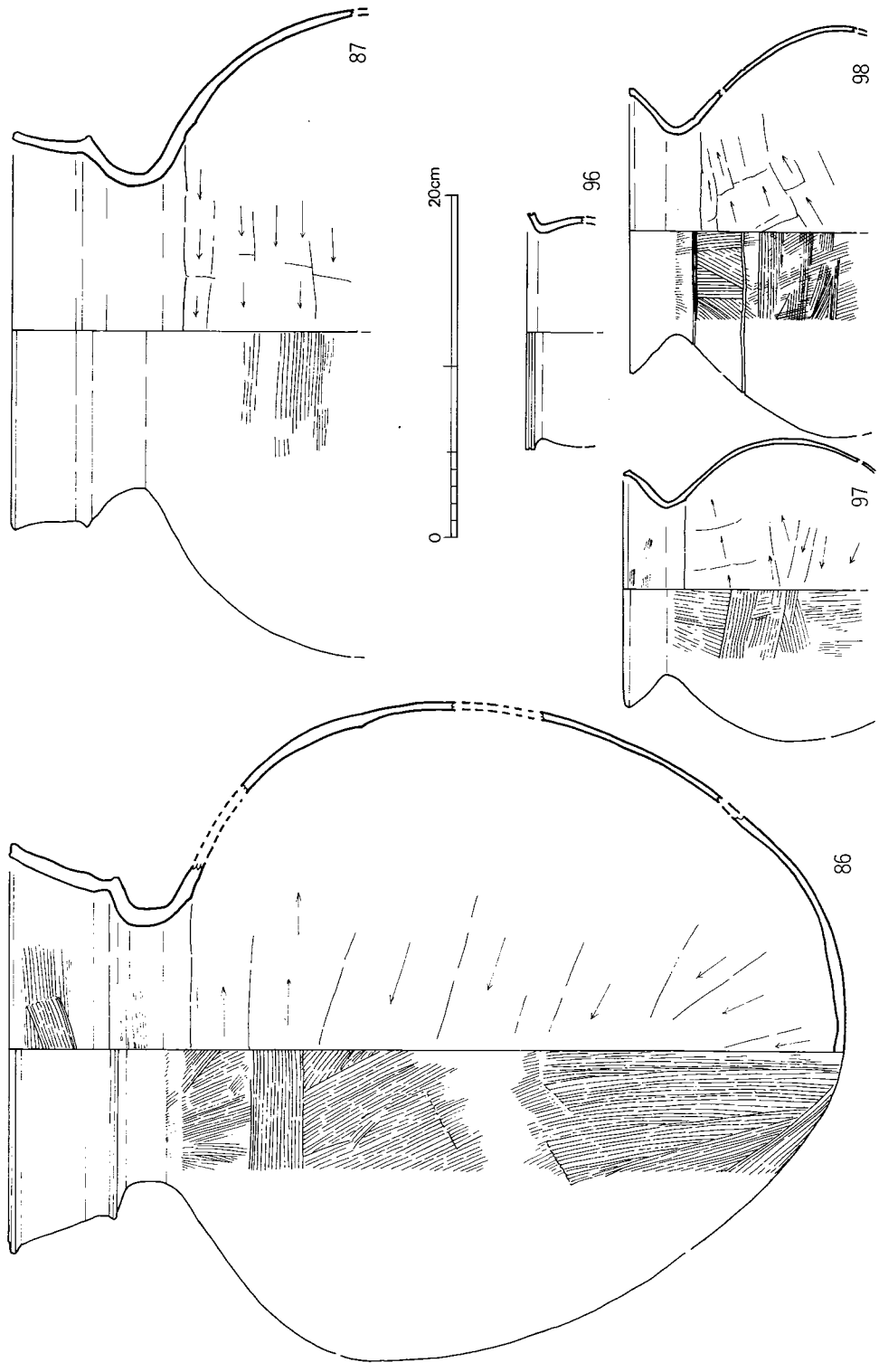
第14图 3·4号住居跡出土土器実測図(1/4)



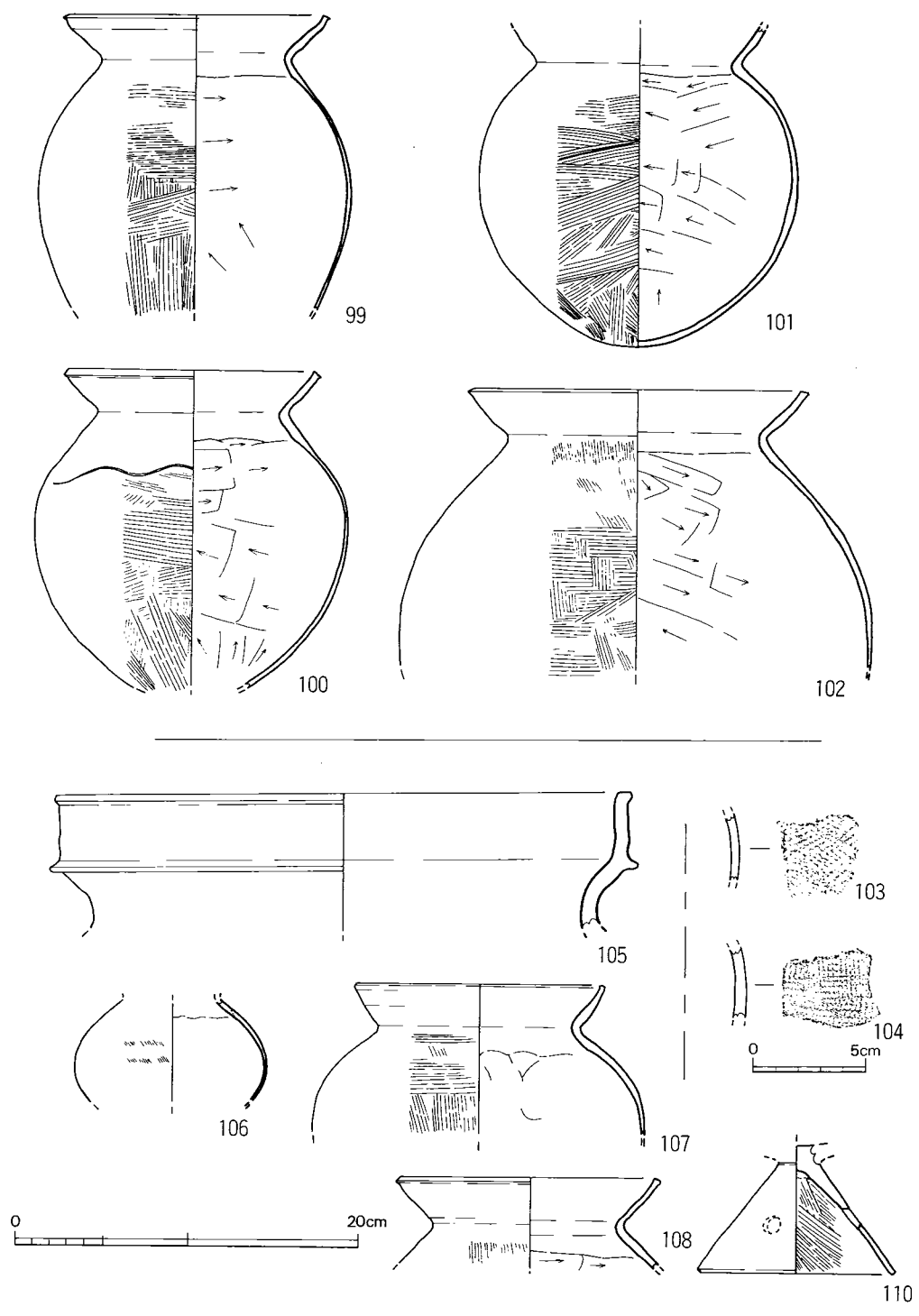
第15图 4号住居跡出土土器实测图(1/4)



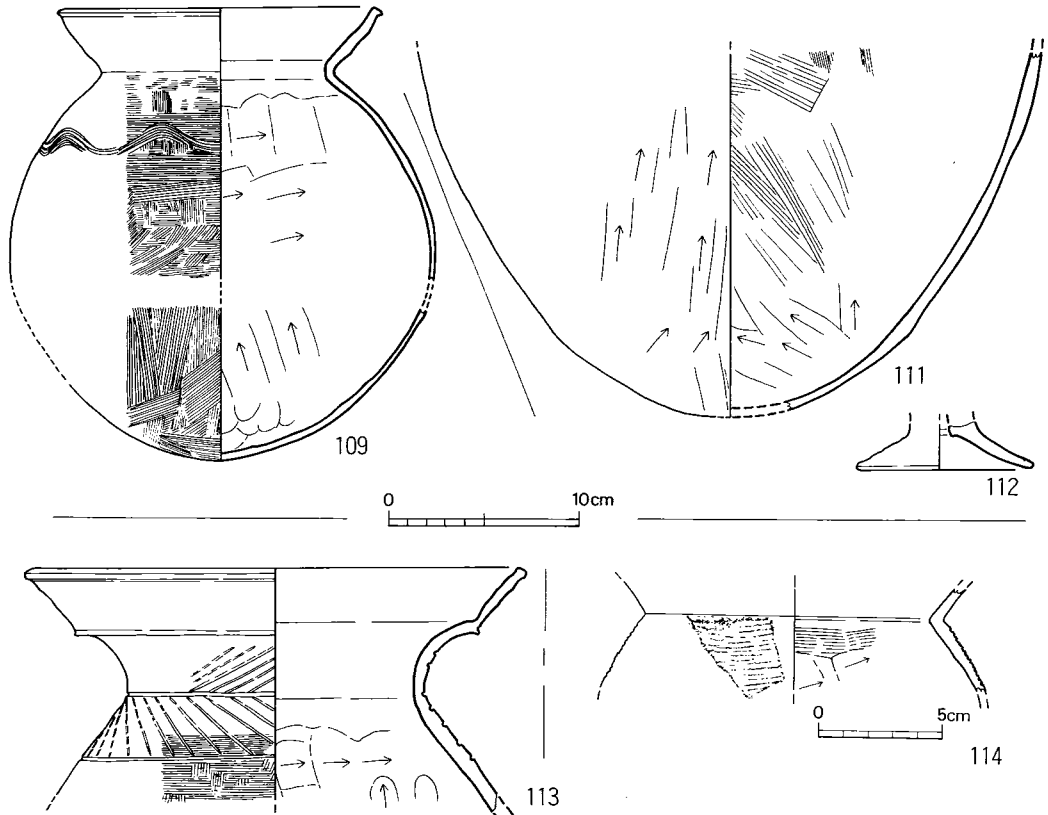
第16图 4·5号住居跡出土土器実測図(1/3, 1/4)



第17图 5号住居跡出土土器実測图 (1/4)



第18图 5·6号住居跡出土土器実測図 (1/3, 1/4)



第19図 6号住居跡・2号土壌，包含層出土土器実測図（1/3, 1/4）

西新町遺跡出土土器一覽表

遺物番号	器種	出土地	法量①口径 ②器高	特徴 ①胎土②色調③内面調整④外面調整	備考
1	短頸壺	1住	①(11.3)	①精良②灰褐色(淡橙褐色)③ナデ④縄席叩き	胴部に沈線巡る
2	二重口縁壺	"	—	①砂粒多量②灰褐色③横ナデ④横ナデ	竹管文を施す
3	"	"	—	①砂粒多量②灰褐色③横ナデ④横ナデ	"
4	"	"	—	①砂粒多量②灰褐色③横ナデ④横ナデ	"
5	"	"	①(24.4)	①砂粒多量②赤褐色③研磨④刷毛目後研磨	
6	小形丸底埴	"	①(9.9)	①精良②明茶褐色③横ナデ、ケズリ後ナデ④研磨	
7	甕	"	—	①砂粒多量②淡灰色③ヘラケズリ④平行叩き	
8	"	"	—	①砂粒少量②灰褐色③ヘラケズリ④平行叩き	
9	"	"	①(22.8)	①砂粒多量②淡黄褐色③横ナデ、ケズリ後ナデ④横ナデ・刷毛目	
10	広口壺	2住	①(20.2)	①細砂多い②赤褐色③横ナデ・叩き後ナデ④平行叩き・格子目叩き	胴部に沈線
11	甌	"	① 19.0 ②(22.7)	①砂(白色・金色)粒多い②黄褐色③ケズリ後ナデ④横ナデ・刷毛目	胴部に黒斑
12	" (把手)	"	—	①砂(白色・金色)粒多い②淡黄褐色④刷毛目後ナデ	
13	二重口縁壺	"	—	①微砂多い②黄灰褐色③横ナデ④横ナデ・刷毛目後ナデ	

遺物番号	器種	出土地	法量①口径 ②器高	特徴 ①胎土②色調③内面調整④外面調整	備考
14	二重口縁壺	2住	①(34.2)	①細砂多い②灰黄土色③横ナデ④横ナデ	頸部に板目小口による施文
15	"	"	①(29.6)	①細砂多い②灰黄褐色③横ナデ・刷毛目後ナデ④横ナデ	
16	"	"	①(36.0)	①細砂多い②淡黄橙色③横ナデ・荒いヘラケズリ④横ナデ・刷毛目	頸部・板目小口・ヘラによる接杉文を施す
17	広口壺	"	①(20.0)	①細砂多い②黄灰褐色③横ナデ④横ナデ・刷毛目後横ナデ	
18	"	"	①(17.8)	①砂粒多い②黄褐～桃灰褐色③横ナデ④横ナデ	
19	"	"	①(15.6)	①砂粒多い②黄褐色③強い横ナデ・ヘラケズリ④横ナデ	
20	小形丸底埴	"	①(12.0)	①砂粒多い②黄褐色③刷毛目後ナデ④不明	
21	"	"	—	①精良②淡赤褐色③横ナデ④横研磨	
22	"	"	①(11.8)	①精良②黄橙色③横研磨・ナデ④刷毛目後研磨	
23	"	"	①(10.8)	①精良②茶褐色③横ナデ・ヘラケズリ④横ナデ・刷毛目	
24	"	"	①(13.1)	①砂粒多い②黄褐色③不明④横ナデ・刷毛目	
25	甕	"	① 11.5	①砂粒少量②明黄～赤褐色③横ナデ・ケズリ後ナデ④横ナデ・刷毛目	
26	"	"	①(19.2)	①砂粒多い②濁黄褐色③横ナデ・ヘラケズリ④横ナデ・刷毛目	
27	"	"	①(13.6)	①砂粒多い②明黄褐色③横ナデ・ヘラケズリ④横ナデ・刷毛目	
28	"	"	①(19.8)	①砂粒多い②暗黄褐色③横ナデ・ヘラケズリ④横ナデ・刷毛目	沈線文口唇部に黒斑
29	"	"	①(17.4)	①砂粒多い②明黄褐色③横ナデ・ヘラケズリ④横ナデ・刷毛目	外面全体にスス付着
30	高杯	"	①(15.2)	①精良②淡赤褐色③横研磨④横研磨	
31	"	"	①(18.0) ②11.9+ $\alpha$	①精良②淡赤褐色③ナデ・研磨④研磨	外面にヘラ圧痕を残す
32	"	"	裾径10.6	①精良②淡橙色③ナデ・刷毛目④横研磨	
33	"	"	①(21.0)	①精良②濁茶褐色③刷毛目・ナデ④不明	
34	"	"	①(25.8)	①精良②黄味橙色③刷毛目, 研磨④刷毛目, 研磨	
35	"	"	—	①精良②淡赤褐色③ナデ④横研磨	
36	"	"	—	①精良②淡赤褐色③ナデ④横研磨	
37	椀	"	①(13.0)	①砂粒多い②淡赤褐色③ナデ④横ナデ	
38	"	"	①13.1②5.4 裾径9.0	①細砂少し金雲母多い②赤褐色③横研磨④横研磨・刷毛目	
39	"	"	①(13.0)	①砂粒多い②赤褐色③横研磨④横研磨・刷毛目	
40	(")	"	裾径(9.4)	①精良②淡赤褐色③④不明	
41	(")	"	—	①精良②浅黄褐色③横ナデ④刷毛目後研磨	
42	器台	"	①(10.4)②(8.5) 裾径(12.6)	①精良②明橙褐色③受部不明・脚部刷毛目④脚部研磨	
43	"	"	①(21.6)	①細砂多量②灰褐色③横ナデ④横ナデ	
44	"	"	①(16.7)	①細砂多量②淡褐色③ナデ・ヘラケズリ④横ナデ	
45	直口壺	3住	① 17.0	①砂粒少ない②黄褐色③横ナデ・ナデ④横ナデ・ナデ	胴部に黒斑・赤斑内面にロクロ調整痕
46	二重口縁壺	"	① 16.5	①微砂多い②黄褐色③横ナデ・ナデ④横ナデ	
47	"	"	—	①微砂多い②淡黄褐色③横ナデ④横ナデ	
48	"	"	①(24.2)	①細砂多い②淡黄褐色③横ナデ・ヘラケズリ④横ナデ・刷毛目後ナデ	

遺物 番号	器 種	出土地	法量①口径 ②器高	特 徴 ①胎土②色調③内面調整④外面調整	備 考
49	小形丸底埴	3 住	—	①精良②内・黄橙色, 外・淡赤褐色③不明④横研磨	
50	二重口縁甕	"	①(13.3)	①砂粒多い②浅橙褐色③横ナデ・ヘラケズリ ④横ナデ・刷毛目	
51	甕	"	①(16.2)	①微砂多い②黄褐色③横ナデ・ヘラケズリ ④横ナデ・刷毛目	
52	"	"	①(12.5)	①砂粒多い②淡黄褐色③横ナデ・ヘラケズリ ④横ナデ・刷毛目	外面全体にスス 附着
53	高 杯	"	裾径(10.8)	①微砂多い②黄橙色③ナデ・刷毛目④研磨	2 孔
54	器 台	"	—	①精良②淡赤褐色③ナデ・刷毛目④研磨	
55	タ コ 壺	"	①内径(4.6)	①細砂多い②黄橙色③ナデ④ナデ	
56	直 口 壺	4 住	①(20.9)	①砂粒多い②黄褐色③ナデ・刷毛目 ④刷毛目後ナデ	
57	"	"	① 13.1	①精良②茶褐色③横ナデ・ナデ④研磨	
58	短 頸 壺	"	①(17.9)	①細砂多い②茶褐色③不明④横ナデ・刷毛目	頸部刻目突帯
59	小形丸底埴	"	①(12.0)	①精良②茶褐色③横ナデ・ナデ④研磨	
60	"	"	① 11.6 ② 7.5	①砂粒含む②淡黄褐色③不明④横ナデ・研磨	
61	"	"	①(12.1)	①微砂多い②明茶褐色③横ナデ④横ナデ・研磨	
62	"	"	①(10.9) ②(10.1)	①細砂多い②黄土色③横ナデ・ナデ④横ナデ・刷毛目	
63	甕	"	① 10.9 ② 12.8	①細砂多い②黄褐色③横ナデ・ケズリ後ナデ ④横ナデ・ナデ	
64	二重口縁甕	"	①(15.2)	①微砂多い②黄褐色③横ナデ・ヘラケズリ ④横ナデ・刷毛目	
65	"	"	①( 9.0)	①砂粒多い②淡黄褐色③横ナデ・ヘラケズリ ④横ナデ・刷毛目	
66	"	"	①(23.0)	①微砂多い②淡褐色③横ナデ・ヘラケズリ ④横ナデ・刷毛目	
67	甕	"	①(16.2)	①細砂多い②淡黄褐色③横ナデ・ヘラケズリ④不明	
68	"	"	①(16.4)	①細砂多い②淡黄褐色③横ナデ・ヘラケズリ ④横ナデ・刷毛目	肩に波状文
69	"	"	①(16.4)	①細砂多い②淡茶褐色③横ナデ・ヘラケズリ ④横ナデ・刷毛目	
70	"	"	①(16.0)	①砂粒多い②灰黄褐色③横ナデ・ヘラケズリ ④横ナデ・刷毛目	
71	"	"	① 16.9	①細砂多い②黄茶褐色③横ナデ・ヘラケズリ ④横ナデ・刷毛目	
72	"	"	—	①砂粒少ない②淡褐色③横ナデ④横ナデ	
73	"	"	—	①砂粒少ない②淡橙色③横ナデ・刷毛目 ④横ナデ・叩き	74と同一個体
74	"	"	—	①砂粒少ない②淡褐色③刷毛目④叩き	
75	—	"	—	①細砂多い②淡黄褐色③ナデ④格子目叩き	
76	鉢	"	①(17.8)	①精良②淡赤褐色③不明④刷毛目後研磨	
77	"	"	①(15.8)	①精良②橙褐色③横ナデ・ナデ④横ナデ・研磨	
78	高 杯	"	裾径(11.0)	①微砂多い②黄褐色③ヘラケズリ・ナデ ④刷毛目・横ナデ	
79	( # )	"	裾径( 9.5)	①砂粒少ない②明茶褐色③ナデ④横ナデ	
80	器 台	"	①20.5②10.0 裾径18.5	①微砂多い②黄褐色③研磨・ヘラケズリ④横ナデ	
81	タ コ 壺	"	①内径(4.8)	①微砂多い②淡褐色③ナデ④ナデ	
82	"	"	①内径(5.5) ②9.3	①砂粒多い②明淡褐色③ナデ④ナデ	
83	"	"	①内径5.6 ②11.3	①砂粒多い②淡黄褐色③ナデ④ナデ	



遺物番号	器種	出土地	法量①口径 ②器高	特徴 ①胎土②色調③内面調整④外面調整	備考
84	手捏土器	4住	—	①微砂多い②暗褐色③ナデ④ナデ	
85	短頸壺	5住	① 17.8 ② 30.1	①細砂やや含む②灰褐色③横ナデ・ナデ ④横ナデ・ナデ	瓦質
86	二重口縁壺	"	① 23.7 ② 48.6	①細砂多い②黄褐色③刷毛目・ナデ・ヘラケズリ ④横ナデ・刷毛目	
87	"	"	①(23.0)	①細砂多い②橙味茶褐色③横ナデ・ヘラケズリ ④横ナデ・刷毛目	
88	直口壺	"	①(14.0)	①細砂少量②黄褐色③横ナデ④横ナデ	
89	小形丸底埴	"	① 10.9 ② 7.7	①精良②明茶褐色③刷毛目後研磨④研磨	85と密着出土
90	"	"	①(10.4)	①精良②橙褐色③横ナデ④不明	
91	"	"	①(13.0) ②(8.3)	①精良②暗赤褐色③研磨・ナデ④研磨・ナデ	
92	"	"	—	①精良②橙褐色③ナデ④横ナデ	
93	広口壺	"	—	①細砂少ない②黄橙色③横ナデ④不明	
94	碗	"	①(12.6)	①砂粒少ない②黄橙色③不明④横ナデ・ケズリ	
95	"	"	—	①精良②淡橙褐色③ナデ④横ナデ	
96	甕	"	①(13.8)	①砂粒少ない②明茶褐色③ナデ④ナデ	外面スス付着
97	"	"	① 13.8	①細砂多い②淡黄褐色③刷毛目後横ナデ・ヘラケズリ ④横ナデ・刷毛目	
98	"	"	①(16.6)	①砂粒多い②黄褐色③横ナデ・ヘラケズリ ④横ナデ刷毛目	肩に沈線文
99	"	"	①(13.8)	①細砂多い②黄褐色③横ナデ・ヘラケズリ ④横ナデ・刷毛目	
100	"	"	① 14.8	①細砂多い②淡褐色③横ナデ・ヘラケズリ ④横ナデ・刷毛目	肩に波状文
101	"	"	①15+ $\alpha$	①細砂多い②淡褐色③横ナデ・ヘラケズリ ④横ナデ・刷毛目	
102	"	"	①(19.2)	①細砂多い②黄褐色③横ナデ・ヘラケズリ ④横ナデ・刷毛目	
103	—	6住	—	①精良②灰黒色③ナデ④格子目叩き	
104	—	"	—	①微砂少ない②灰青色③ナデ④格子目叩き	
105	二重口縁壺	"	①(33.4)	①砂粒多い②黄褐色③ナデ④不明	
106	( $\cup$ )	"	—	①精良②明茶褐色③ナデ④刷毛目・研磨	
107	甕	"	①(14.5)	①細砂やや多い②黄褐色③横ナデ・ヘラケズリ ④横ナデ・刷毛目	外面スス付着
108	"	"	①(15.4)	①細砂多い②淡褐色③横ナデ・ヘラケズリ ④横ナデ・刷毛目	
109	"	"	①17.2 ②18.6+ $\alpha$	①砂粒少量②淡灰褐色③横ナデ・ヘラケズリ ④横ナデ・刷毛目	肩に波状文
110	器台	"	裾径(11.5)	①精良②明茶褐色③刷毛目④刷毛目後研磨	
111	甕	2土	—	①砂粒多量②灰黄褐色③刷毛目・ヘラケズリ ④ナデ・ヘラケズリ	
112	(高杯)	"	裾径(9.3)	①細砂少ない②黄土～明茶褐色③ナデ④ナデ(?)	
113	壺	包含層	①(26.3)	①微砂多い②橙黄褐色③横ナデ・ヘラケズリ ④横ナデ・刷毛目	ヘラ描き稜杉文
114	甕	"	—	①微・細砂多い②黄褐色③横ナデ・刷毛目 ④横ナデ・叩き	

## 2. 土 壌

今回土壌として取り扱った遺構は5基を数える。全て調査区西半に集中し、住居跡埋没後に掘り込まれる。時期・性格の不明なものが多いが、形状と出土遺物から中世の木棺墓と認められる土壌もある。



1



2



3

1 発掘区全景  
(西から)

2 発掘区東半  
(南から)

3 発掘区西半  
(北から)



3 2号住居内軟質土器



4 3号住居跡

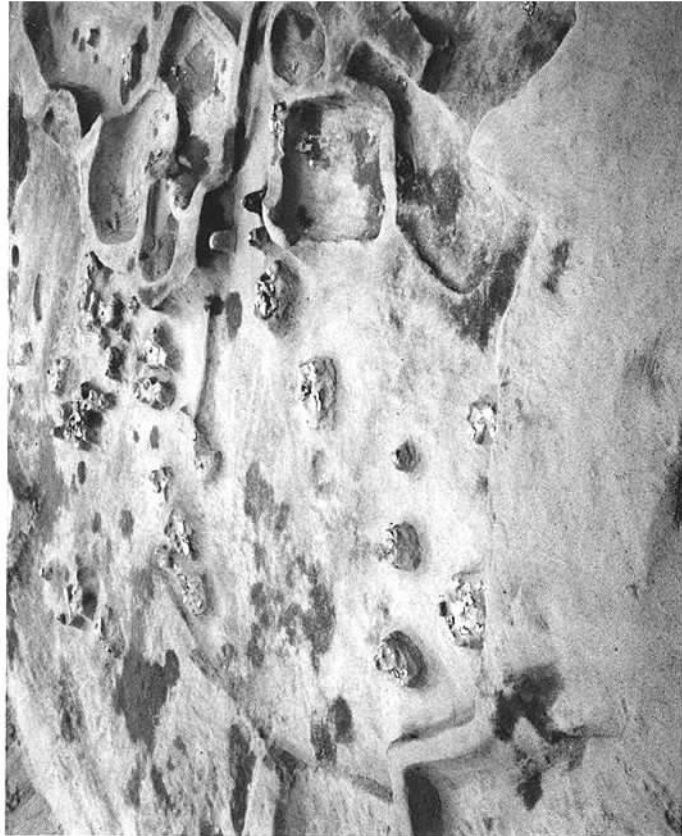


1 1号住居跡



2 2号住居跡





3 5号住居跡



図版3

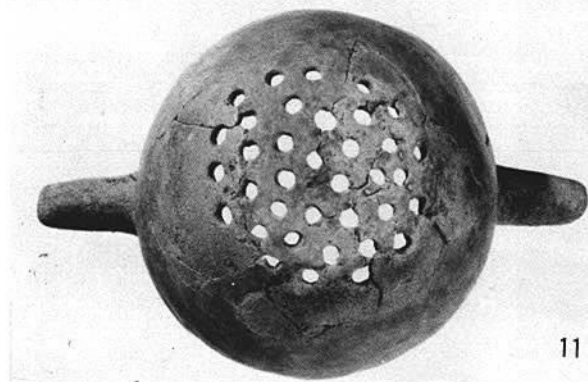
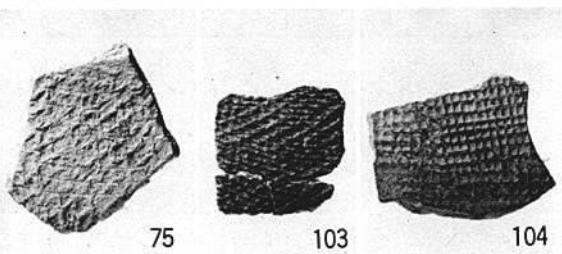
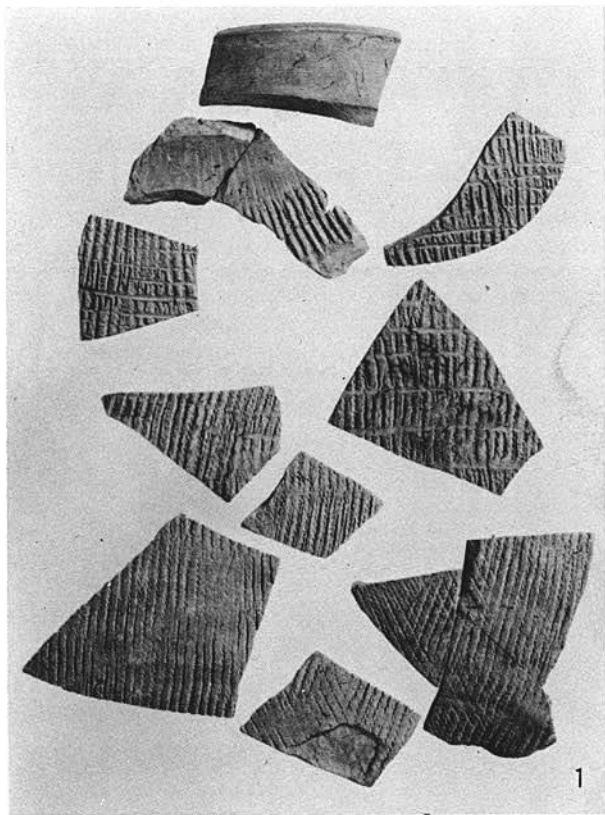
4 5号住居跡内瓦質土器



1 4、6号住居跡(北から)



2 4号住居跡内土器

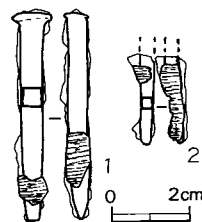


朝鮮半島系土器

土 器 一 覧 表

(単位cm)

No.	平面形	長さ	幅	深	方向	備 考
1	隅丸長方形	133	110	40	N49°E	5号より新
2	不整楕円形	180	130	30	N20°W	3号より新(第19図111・112)
3	長 方 形	180	130	40	N82°E	
4	不整長方形	140+	90	30	N88°E	鉄釘 (第20図1)
5	"	225	100	50	N88°E	鉄釘(第20図2)、4号より新



第20図 4・5号土壙出土鉄釘実測図 (1/2)

## IV 結 語

今回の調査は限定された地区の調査であっただけに、限定された時期の遺構のみが検出されたが、土器資料としては重要なものが含まれていた。検出された遺構は、古式土師器を多量にもつ7軒の竪穴式住居跡であったが、遺構としては砂丘上に営まれたものであったために、構造的に不明な点が多いのが残念である。住居跡の時期は、1号住居跡が庄内式を含むことから多少古いが、他の6軒の住居跡は布留式併行期にあって大差がない。2~6号住居跡から出土する土器は、布留式土器のうちでも古期のものに限定されているが、3~6号住居跡は重複することから同時共存ではなく時期的にも小差があることになる。とくに、土器量の多い4・5号住居跡は、形式的には大差のないIIa式に含まれることから、重複はしているが時間的にも大差のない住居跡であることが判明すると同時にIIa式の中の細部的な型式変遷が把握できる。

今回の調査の最大の成果は、各住居跡に朝鮮半島産の土器が含まれていたことで、とくに2・5号住居跡出土の土器は完形に近く、これまで見ることのできなかつた型式のものである。今回出土した朝鮮半島産の土器は、質・型式両面において多様で、統一した土器型式名で呼ぶことができない。1号住居跡出土の縄文のある甕は、質的には陶質土器といえるものであろうが、いわゆる須恵質のものではなく、2号住居跡出土の赤褐色の壺(10)も、日本での統一した呼称がない。5号住居跡出土の壺(85)は、典型的な瓦質土器で、須恵質の陶質土器や1号住居跡の甕(1)とは区別されるべきものである。2号住居跡出土の甗は、質的には土師器と区別できないが、製作技法からすれば土師器とは違うところから、製作者と製作地に問題がある。

これらの朝鮮半島系の土器は、日本国内はもちろん半島においても同型式のものが見あらず、併行関係を論ずるには資料不足といわざるを得ないが、形式的に近いものがあることから資料の増加を待って、今後の課題としたい。しかし、現状の日本の土師器研究からいえることは、1~6号住居跡が4世紀前半から中頃に比定されることから、同時期の朝鮮半島産の土器研究にとっては基礎資料ともなりうるのではなかろうか。また、三雲遺跡と同様に墳墓以外の集落から出土する朝鮮半島系土器としても、希少価値がある。(柳田)

註1 「昌原三東洞甕棺墓」(『釜山女子大学校博物館調査報告書』第1輯 1984)

註2 柳田康雄「三・四世紀の土器と鏡」(『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』 1982)

西 新 町 遺 跡

第 72 集

昭 和 60 年 3 月 31 日

發 行 福 岡 県 教 育 委 員 会  
福 岡 市 博 多 区 東 公 園 7-7

印 刷 有 限 会 社 松 古 堂 印 刷  
福 岡 市 西 区 大 字 周 船 寺 407